

文芸と道德

夏目漱石

青空文庫

私はこの大阪で講演をやるのは初めてであります。またこういう大勢の前に立つのも初めてであります。実は演説をやるつもりではない、むしろ講義をする気で来たのですが、講義と云うものはこんな多人数を相手にする性質のものでありません。これだけの聴衆全体に通るような声を出そうとすれば——第一出る訳がないけれども、万一出るにしても十分ぐらいで壇を降りなければやりきれないだろうと思います。したがって、始めての事でもあるしこれほど御集りになった諸君の御厚意に対してもなるべく御満足の行くように、十分面白い講演をして帰りたいのは山々であるけれども、しかしあまり大勢お出になったから——と云って、けっしてつまらぬ演説をわざわざしようなどという悪意は毛頭無いのですけれども、まあなるべく短かく切上げる事にして、そうして——まだ後にも面白いのがだいありますから、その方で埋め合せをして、まず数でコナすようなことにしようと思う。実際この暑いのにこうお集りになって竹の皮へ包んだ寿司^{すし}のように押し合っているのはたまりますまい。また講演者の方でも周囲前後左右から出る人の息だけでも——ちよつとここへ立って御覧になればすぐ分りますが——実際容易なものではありません。実はこういうように原稿紙へノートが取っておりますから、時々これを見ながら進行すれば順

序もよく整い遺漏も少なく、大変都合が好いのですけれども、そんな手温い事をしていてはとても諸君がおとなしく聴いていて下さるまいと思うから、ところどころ——ではない大部分端折はしよつてしまつてやるつもりであります。しかしもしおとなしく聴いて下されば十分にやるかも知れない。やろうと思えばやれるのです。

問題はあすこに書いてある通り「文芸と道徳」と云うのですが、御承知の通り私は小説を書いたり批評を書いたり大体文学の方に従事しているために文芸の方のことをお話する傾かたむきがとうございます。大阪へ来て文芸を談ずると云うことの可否は知りません。儲もつける話でもしたら一番よからうと思つていますが、「文芸と道徳」では題をお聴きになつただけでも儲かりません。その内容をお聴きになつてはなお儲かりません。けれども別に損をするというほどの縁喜えんぎの悪い題でもなからうと思うのです。もちろん御聴おききになる時間ぐらゐは損になりますが、そのくらいな損は不運と諦あきらめて辛抱して聴いていただきたい。

昔の道徳と今の道徳と云うものの区別、それからお話をしたいと思いますが——どうも落ちついてやつていられないような気がしてたまらない。その前にちよつとこの題の説明をしますが、「道徳と文芸」とある以上、つまり文芸と道徳との關係に帰着するのだから、道徳の關係しない方面、あるいは部分の文芸と云うものはここに論ずる限りでない。した

がつて文芸の中うちでも道德の意味を帯びた倫理的の臭味くさみを脱却する事のできない文芸上の述作についてのお話と云つてもよし、文芸と交渉のある道德のお話と云つてもよいのです。それでまず道德と云うものについて昔と今の区別からお話を始めてだんだん進行する事に致します。

昔の道德、これは無論日本での御話ですから昔の道德といえは維新前の道德、すなわち徳川氏時代の道德を指すものでありますが、その昔の道德はどんなものであるかと云うと、あなた方がたも御承知の通り、一口に申しますと、完全な一種の理想的の型こしらを拵こしらえて、その型を標準としてその型は吾人が努力の結果実現のできるものとして出立したものであります。だから忠臣でも孝子でももしくは貞女でも、ことごとく完全な模範を前へおいて、我々ごとき至らぬものも意思のいかん、努力のいかんに依つては、この模範通りの事ができるんだといったような教え方、徳義の立て方であつたのです。もつとも一概に完全と云いまして、意味の取り方で、いろいろになりますけれども、ここに云うのは仏語ぶつごなどで使う純一無雑まじまず混まじり気けのないところと見たら差さ支さないでしよう。例えば鉾あらがねのように種々な異分子を含んだ自然物でなくって純金と云つたように精鍊した忠臣なり孝子なりを意味しております。かく完全な模型を標ひょうぼう榜ぼうして、それに達し得る念力をもつて修養の功を積

むべく余儀なくされたのが昔の徳育であります。もう少し細かく申すはずですが、略してまずそのくらいにして次に移ります。

さてこういう風の倫理観や徳育がどんな影響を個人に与えどんな結果を社会に生ずるかを考えて見ますと、まず個人にあつてはすでに模範が出来上りまたその模範が完全という資格を具えたものとしてあるのだから、どうしてもこの模範通りにならなければならん、完全の域に進まなければならんと云う内部の刺激やら外部の鞭撻べんたつがあるから、模倣まほうという意味は離れますまいが、その代り生活全体としては、向上の精神に富んだ気概の強い邁ま往いおうの勇を鼓舞されるような一種感激性の活計を営むようになります。また社会一般から云うと、すでにこういう風な模範的な間然するところなき忠臣孝子貞女を押し立てて、それらの存在を認めるくらいだから、個人に対する一般の倫理上の要求はずいぶん苛酷なものである。また個人の過失に対しては非常に厳格な態度をもっている。少しの過ちがあつても許さない、すぐ命に係してくる。そうでしょう、昔の人は何ぞと云うと腹を切つて申訳をしたのは諸君も御承知である。今では容易に腹を切りません。これは腹を切らないですむからして切らないので、昔だつて切りたい腹ではけつてなかつたんでしよう。けれども切らせられる。いわゆる詰腹つめばらで、社会の制裁が非常に惡辣苛酷あくらつかくなため生きて人

に顔が合わされないからむやみに安く命を棄^すてるのでしよう。

今の人から見れば、完全かも知れないが実際あるかないか分らない理想的人物を描いて、それらの偶像に向つて瞬間の絶間なく努力し感激し、発憤し、また随喜し渴仰して、そうして社会からは徳義上の弱点に対して微塵^{みじん}の容赦もなく嚴重に取扱われて、よく人が辛抱しておつたものだという疑も起るが、これにはいろいろの原因もありましよう。第一には今のように科学的の觀察が行届かなかつた。つまり人間はどう教育したつて不完全なものであると云うことに気がつかなかつた。不完全なのは、我々の心掛が至らぬからの横^{おうちや}着^くに起因するのだからして、もう少し修養して黒砂糖を白砂糖に精製するような具合に

向上しなければならんという考で一生懸命に努力したのである。すなわち昔の人には批判的精神が乏しかつた。昔から云い伝えている孝子とか貞女とか称するものが、そつくりそのままの姿で再現できるという信念が強くて、批判的にこれらの模範を視^みる精神に乏しかつたと云うのがおもなる原因でありましよう。一口に云えば科学と云うものがあまり開けなかつたからと云つてようございます。のみならずその当時は交通が非常に不便でありまして、東京から大阪へちよつと手紙一本で呼出されて来て講演をすると云うようなことすら、できないとは限りませんが、なかなか億劫^{おっくう}でこう手輕には行きません。来るにして

も駕籠かごに揺られて五十三次を順々に越すのだから、たやすくは間に合いかねます。間に合わないですむとすれば、私がどんな人間であるかは、諸君に知れずにすんでしまう訳である。知らなければよほどえらい人だと思ってくれやしないかと思う。こうやって演壇に立つて、フロックコートも着ず、妙な神戸辺の商館の手代が着るような背広などを着てひよこひよこしては安つぽくていけない。ウンあんな奴やつかという気が起るにきまつている。が駕籠の時代ならそうまで器量を下げずにすんだかも知れない。交通の不便な昔は、山の中に仙人がいると思っておつたくらいだから、江戸には漱石といって仙人ではないが、まあ仙人に近い人間がいるそうだからの評判で持ち切つて下されば私もはなはだ満足の至りであつたろうが、今日こんにち汽車電話の世の中ではすでに仙人そのものが消滅したから、仙人に近い人間の価値も自然下落して、商館の手代そのままの風采ふうさいを残念ながら諸君の御覧に入れなければならぬ始末になります。次に、昔は階級制度で社会が括くくられていたのだから、階級が違ふと容易に接触すらできなくなる場合も多かった。今でも天子様などにはむやみには近づけません。私はまだ拝調はいてうをしません、昔は一般から見ても今の天皇陛下以上に近づきたい階級のものがたくさんおつたのです。一国の領主に言葉を交えるのすら平民には大変な異例でしょう。土下座とか云つて地面じべたへ坐つて、ピタリと頭を下げ

て、肝腎の駕籠かごが通る時にはどんな顔の人がいるのかまるで物色する事ができなかった。第一駕籠の中には化物がいるのかさえ分らなかったくらいのもので聞いています。してみると階級が違えば種類が違うという意味になつてその極はどんな人間が世の中にあると不思議を挟はさむ余地のなくらいに自他の生活に懸隔けんかくのある社会制度であつた。したがつて突拍子とつぴようしもない偉い人間すなわち模範的な忠臣孝子その他が世の中には現にいるという觀念がどこかにあつたに違ない。

以上の諸原因からして自然模範的の道德を一般に強しいて怪しまなかつたのでありましよう。また強いられて黙つていもし、あるいは自みづから進んで己に強しいものでしょう。ところが維新以後四十四五年を経過した今日になつて、この道德の推移した経路をふり返つて見ると、ちゃんと一定の方向があつて、ただその方向にのみ遅疑なく流れて来たように見えるのは、社会の現象を研究する学者に取つてはなほだ興味のある事柄ことがらと云わなければなりません。しからば維新後の道德が維新前とどういう風に違つて来たかと云うと、かのピタリと理想通りに定つた完全の道德というものを人に強しうる勢力がだんだん微弱になるばかりでなく、昔渴仰した理想その物がいつの間にか偶像視せられて、その代り事実と云うものを土台にしてそれから道德を造り上げつつ今日こんにちまで進んで来たように思われる。

人間は完全なものでない、初めは無論、いつまで行つても不純であると、事実の觀察に本いた主義を標榜ひようぼうしたと云つては間違になるが、自然の成行を逆に点検して四十四年の道徳界を貫いている潮流を一句につづめて見るとこの主義にほかならんように思われるから、つまりは吾々われわれが知らず知らずの間にこの主義を実行して今日に至つたと同じ結果になつたのであります。さて自然の事実をそのままに申せば、たといいかな忠臣でも孝子でも貞女でも、一方から云えばそれぞれ相当の美德を具そなへているのは無論であるがこれと同時に一方ではずいぶんいかがわしい欠点をもっている。すなわち忠であり孝であり貞であると共に、不忠でもあり不孝でも不貞でもあると云う事であります。こう言葉に現わして云うと何だか非常に悪くなりますが、いかに至徳の人でもどこかしらに悪いところがあるように、人も解釈し自分でも認めつつあるのは疑もない事実だろうと思うのです。現に私がかうやつて演壇に立つのは全然諸君のために立つのである、ただ諸君のために立つのである、と救世軍のようなことを言つたつて諸君は承知しないでしょう。誰のために立つているかと聞かれたら、社のために立つている、朝日新聞の広告のために立つている、あるいは夏目漱石を天下に紹介するために立つていると答えられるでしょう。それで宜よろしい。けつして純粹な生一本きいつぽんの動機からここに立つて大きな声を出しているのではない。この

暑さに襟えりのグタグタになるほど汗を垂らしてまで諸君のために有益な話をしなければ今晚眠られないというほど奇特きとくな心掛は実のところありません。と云ったところでこう見えても、満まんざら更さら好意も人情も無いわがまま一方の男でもない。打ち明けたところを申せば今度の講演を私が断つたつて免職になるほどの大事件ではないので、東京に寝ていて、差さ支えがあるとか健康が許さないとか何なんとかかとか言訳の種こしらを拵こしらえさえすれば、それですむのです。けれども諸君のためを思い、また社のためを思い、と云うと急に偽善めきますが、まあ義理やら好意やらを加味した動機からさつそく出て来たとすればやはり幾分か善人の面影おもかげもある。有ありてい体たいに白状すれば私は善人でもあり悪人でも——悪人と云うのは自分ながら少々ひどいようだが、まず善悪とも多少混まじつた人間なる一種の代物しろもので、砂もつき泥もつき汚きたない中に金と云うものが有るか無いかぐらゐに含まれているくらいのところだろうと思う。私がこういう事を平気で諸君の前で述べて、それであなた方がたは笑って聴いているくらいなのだから、今の人は昔に比べるとよほど倫理上の意見についても寛大になっている事が分ります。これが制裁の嚴重で模範的行動を他に強しいなければやまない旧幕時代であつたら、こんな露骨を無遠慮にいう私はきつと社長に叱おられます。もし社長が大名だつたなら叱られるばかりでなく切腹を仰おほせつかるかも知れないところですけれど、明治四

十四年の今日は社長だつて黙っている。そうしてあなた方は笑っている。これほど世の中は穩かになつて來たのです。倫理觀の程度が低くなつて來たのです。だんだん住みやすい世の中になつて御互に仕合しあわせでしよう。

かく社会が倫理的動物としての吾人に対して人間らしい卑近な徳義を要求してそれで我慢しこくするようになって、完全とか至極とか云う理想上の要求を漸次ぜんじに撤回してしまつた結果はどうなるかと云うと、まず従前から存在していた評価率（道德上の）が自然の間に違つてこなければならぬ訳になります。世の中は恐ろしいもので、だんだんと道德が崩くずれてくるとそれを評価する眼が違つてきます。昔はお辞儀の仕方が氣に入らぬと刀の束つかへ手をかけた事もありましたろうが、今ではたとい親密な間柄あいだからでも手数のかかるような挨拶あいさはやらないようであります。それで自他共に不愉快を感じずにすむところが私のいわゆる評価率の変化という意味になります。御辞儀などはほんの一例ですが、すべて倫理的意義を含む個人の行為が幾分か従前よりは自由になつたため、窮屈の度が取れたため、すなわち昔のように強しいて行い、無理にもなすという瘡我慢やせがまんも圧迫も微弱になつたため、一言にして云えば徳義上の評価がいつとなく推移したため、自分の弱点と認めるようなことを恐れもなく人に話すのみか、その弱点を行為の上に露出して我も怪しまず、人も咎とがめ

ぬと云う世の中になったのであります。私は明治維新のちょうど前の年に生れた人間でありますから、今日この聴衆諸君の中に御見えになる若い方とは違つて、どっちかという中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のような怪しげなものでありますが、私らのような年輩の過去に比べると、今の若い人はよほど自由が利きいているように見えます。また社会がそれだけの自由を許しているように見えます。漢学塾へ二年でも三年でも通つた経験のある我々には豪えらくもないのに豪えらそうな顔をしてみたり、性を矯ためて瘡我慢やせがまんを言い張つて見たりする癖がよくあつたものです。——今でもだいぶその気味があるかも知れませんが。

——ところが今の若い人は存外淡泊たんぱくで、昔のような感激性の詩趣を倫理的に發揮する事はできないかも知れないが、大体吹き抜けの空筒からづつで何でも隠かくさないところがよい。これは自分を取り繕とろつくいたくないという結構な精神の働いている場合もありましょうし、また隠かくさない明けッ放しの内臓を見せても世間で別段鼻つまを抓つかんで苦にがい顔をするものがないからでもありませんが、私の所へ時々若い人などが初めて訪問に来て、後から手紙などにその時の感想をありのままに書いて送つてくれる場合などでさえ思いもよらぬ告白をする事があるから面白いです。と云つて大した弱点を見てくれと云わんばかりに書く訳でもないが、とにかくこつちから頼みはしないので、先方から勝手に寄こすくらいの酔興的な閑文

字すなわち一種の意味における芸術品なのだから、もし我々の若い時分の気持で書くとするれば、天下の英雄君と我とのみとまで豪がらないにせよ、習俗的に高雅な觀念を会^え釈^{しゃく}なく文字の上に羅列して快よい一種の刺戟^{しげき}を自己の倫理性が受けるように詩趣を發揮するのが通例であるが、今例に引こうとする手紙などにはそんな面影^{おもかげ}はまるでない。まず門を入ったら胸騒ぎがしたとか、格子^{こうし}を開ける時にベルが鳴ってますます驚いたとか、頼むと案内を乞うておきながら取次^{とりつぎ}に出て来た下女が不在^{るす}だと言ってくればよかったと沓^{くつぬ}脱^だの前で感じたとか、それが御宅ですという一言で急に帰りたい心持に変化したとか、ところへこちらへ上れとまた取次に出て来られますます恐縮したとか、すべてそういう弱い神経作用がいささかの飾り気もなく出ている。徳義的批判を含んだ言葉で云えば臆^{おくび}病^{よう}とか度胸がないとか云うべき弱点を自由に白状している。たかが夏目漱石の所へ来るのにこうビクビクする必要はあるまいと思いかも知れませんが實際あるのです。しかし私はこれが今の青年だからあるのだと信じます。旧幕時代の文学のどこをどう尋ねてもこんな意味の訪問感想録はけっして見当るまいと信じます。この春でしたがある所に音楽会がありました。その時に私の知った人が演奏台に立って歌をうたいました。私は招待を受けて一番前の列の真中^{まんなか}にいて聴いていました。ところがその歌は下手でした。私は音楽

を聞く耳も何も持たない素人^{しろうと}ではあるがその人のうたいぶりはすこぶる不味い^{まず}ように感じました。あとでその人に会って感じた通り不味いと云いました。ところがその音楽家はあの演奏台に立った時、自分の足がブルブル顫^{ふる}えるのに気が着いたかと私に聞きます。私は気が着かなかつたけれども当人自身は足が顫えたと自白する。昔ならたとい足が顫えても顫えないと云い張つたでしょう。何とか負惜みでも言いたいくらいのところへ持つて来て、人の気がつきもしないのに自分の口から足がガクガクしたと自白する。それだけ今の人が淡泊になつたのじやないでしょうか。またこれほど淡泊になれるだけ世間の批判が寛大になつたのじやないでしょうか。人間にそのくらいな弱点はありがちの事だとテンから認めているのじやないでしょうか。私は昔と今と比べてどつちが善いとか悪いとかいうつもりではない、ただこれだけの区別があると申したのであります。また過去四十何年間の道德の傾向は明かにこういう方向に流れつつあるという事実を御認めにならん事を希望するのであります。

古今道德の区別はこれで切上げておいて話は突然文芸の方へ移ります。もつとも文芸の方の話を詳しく云うつもりではないから、必要な説明だけに留^{とど}めて、ごくざつとしたところを申しますが、近年文芸の方で浪漫主義及び自然主義すなわちロマンチズムとナチュ

ラリズムという二つの言葉が広く行われて参りました。そうしてこの二つの言葉は文芸界専有の術語でその他の方面には全く融通の利かないものであるかのごとく取扱われております。ところが私はこれからこの二つの言葉の意味性質を極めて簡略に述べて、そうしてそれを前^{ぜん}申上げた昔と今の道徳に結びつけて両方を綜^{そうごう}合して御覧に入れようと思うのです。つまり浪漫主義も自然主義も文芸家専有の言語ではないという意味が分ればその結果自然の勢いでこれらがまた前説明した二種の道徳と関係して来ると云うのであります。

この浪漫主義自然主義の文学についてちよつと申上げる前にあらかじめ諸君の御注意を煩^{わづら}わしておきたい事がありますが、前も御断り申したごとく今日のお話はすべて道徳と文芸との交渉関係でありますから、二種類の文学のうち（ことに浪漫主義の文学のうち）道徳の分子の交つて来ないものは頭から取^{とり}除けて考えていただきたい。それからよし道徳の分子が交つていても倫理的觀念が何らの挑^{ちようはつ}撥を受けない——否受け得べからざるていの文学もまた取り除^のけて考えていただきたい。それらを除いた上でこの二種類の文学を見渡して見ると浪漫主義の文学にあつてはそこに出てくる人物の行為心術が我々より偉大であるとか、公明であるとか、あるいは感激性に富んでいるとかの点において、読者が倫理的に向上遷善^{しげき}の刺戟^{しげき}を受けるのがその特色になっています。この影響は昔し流行^{はや}った勸^か

善懲惡んげんちやうあくという言葉と関係はありますが、けつして同じではない。ずっと高尚の意味で

云うのですから誤解のないように願います。また自然主義の文学では人間をそう伝説的英雄の末孫か何かであるようにもつたいをつけてありがたそうには書かない。したがって読者も作者も倫理上の感激には乏しい。ことによると人間の弱点だけを綴りつづ合せたように見える作物もできるのみならず往々おうおうその弱点がわざとらしく誇張される傾きかたむさえあるが、つまりは普通の人間をただありのままの姿に描くのであるから、道德に関する方面の行為も疵瑕ししか交出するということは免まぬかれない。ただこういうあさましいところのあるのも人間本来の真相だと自分でも首肯うなずき他にも合点がてんさせるのを特色としている。この二つの文学を詳しく説明すればそれだけで大分時間が経ちますから、まあ誰も知っているぐらいの説明で御免ごめんを蒙こうむつて、この二つの文学が前の二傾向の道德をその作物中に反射しているということにさえ気がつけば、ここに始めて文芸と道德とがいずれの点において関係があるかと云うことも明かになつて来ようと思います。

返す返す申すようですが題がすでに文芸と道德でありますから、道德の関係しない文芸のことは全然論外に置いて考えないと誤解を招きやすいのであります。道德に關係の無い文芸の御話をすれば幾らでもありますが、例えば今私がここへ立つてむずかしい顔をして

諸君を眼下に見て何か話をして、最中に何かの拍子で、卑陋な御話ではあるが、大きな放屁ほうひをするとする。そうすると諸君は笑うだろうか、怒るだろうか。そこが問題なのである。と云うといかにも人を馬鹿にしたような申し分であるが、私は諸君が笑うか怒るかでこの事件を二様に解釈できると思う。まず私の考では相手が諸君のごとき日本人なら笑うだろうと思う。もつとも実際やつてみなければ分らない話だからどっちでも構わんなものだけれども、どうも諸君なら笑いそうである。これに反して相手が西洋人だと怒りそうである。どうしてこう云う結果の相違を来すかというと、それは同じ行為に対する見方が違うからだと言わなければならない。すなわち西洋人が相手の場合には私の卑陋ひろうのふるまいを一瞬に徳義的に解釈して不徳義——何も不徳義と云うほどの事もないでしょうが、とにかく礼を失していると見て、その方面から怒るかも知れません。ところが日本人だと存外単純に見做みなして、徳義的の批判を下す前にまず滑稽こっけいを感じて噴き出すだろうと思うのです。私のしかつめらしい態度と堂々たる演題とに心を傾かたむけて、ある程度まで嚴肅の気分を未来に延長しようという予期のある矢先へ、突然人前では憚はばるべき異な音を立てられたのでその矛盾の刺激に堪たえないからです。この笑う刹那せつなには倫理上の觀念は毫ごうも頭を擡もたげる余地を見出し得ない訳ですから、たとい道徳的批判を下すべき分子が混入してくる事

件についても、これを徳義的に解釈しないで、徳義とはまるで関係のない滑稽こっけいとのみ見る事もできるものだと言ふ例証になります。けれどももし倫理的の分子が倫理的に人を刺し戟げきするようにまたそれを無関係の他の方面にそらす事ができぬように作物中に入込んで来たならば、道德と文芸というものは、けつして切り離す事のできないものであります。両者は元来別物であつて各独立したものであるというような説も或る意味から云えば真理ではあるが、近來の日本の文士のごとく根柢こんていのある自信も思慮もなしに道德は文芸に不要であるかのごとく主張するのははなはだ世人を迷わせる盲者の盲論と云わなければならぬ。文芸の目的が徳義心を鼓吹こすいするのを根本義にしていけない事は論理上しかるべき見解ではあるが、徳義的の批判を許すべき事件が経となり緯となりて作物中に織り込まれるならば、またその事件が徳義的平面において吾人に善惡邪正の刺戟しげきを与えるならば、どうして両者をもつて没交渉とする事ができよう。

道德と文芸の關係は大体においてかくのごときものであるが、なお前に挙げた浪漫自然二主義についてこれらがどういふ風に道德と交渉しているかをもう少し明瞭めいりょうに調べてみる必要があると思います。すなわちこの二種の文学についてどこが道德的でどこが芸術的であるかを分解比較して一々点検するのであります。こうすれば文芸と道德の關係が一

層明瞭になるのみならず、また浪漫自然二文学の關係もまた一段と判然するだろうと思います。第一、浪漫派の内容から言うと、前申した通り忠臣が出て来たり、孝子が出て来たり、貞女が出て来たり、その他いろいろの人物が出て来て、すべて読者の徳性を刺激してその刺激に依つて事をなす、すなわち読者を動かそうと云う方法を講じますから、その刺激を与える点は取りも直さず道義的であると同時に芸術的に違ない。(文学と云うものが感情性のものであつて、吾人の感情を挑撥喚起するのがその根本義とすれば)かく浪漫派は内容の上から云つて芸術的であるけれども、その内容の取扱方に至るとあるいは非芸術的かも知れません。という意味はどうもその書き方によくない目的があるらしい。こういう事件をこう写してこう感動させてやろうとかこう鼓舞してやろうとか、述作そのものに興味があるよりも、あらかじめ胸に一物があつて、それを土台に人を乗せようとしたがる。どうもややともするとそこに厭味が出て来る。私が今晚こうやって演説をするにしても、私の一字一句に私と云うものがつきまわつておつてどうかして笑わせてやろう、どうかして泣かせてやろうと擦つたり辛子を管めさせるような故意の痕跡が見え透いたら定めし御聴き辛いことで、ために芸術品として見たる私の講演は大いに価値を損ずるごとく、いかに内容が良くても、言い方、取扱い方、書き方が、読者を釣つてやろうとか、

挑撥 ちようはつ

してやろうとかすべて故意の趣があれば、その故意わざとらしいところ不自然なところはすなわち芸術としての品位かかわに關つて来るのです。こういう欠点を芸術上には厭味いやみといつて非難するのです。これに反して自然主義から云えば道義の念に訴えて芸術上の成功を収めるのが本領でないから、作中にはずいぶん汚ない事も出て来る、鼻持のならない事も書いてある。けれどもそれが道心を沈滞せしめて向下墮落の傾向を助長する結果を生ずるならばそれは作家か読者かどつちかが悪いので、不善挑撥もまたけつしてこの種の文学の主意でない事は論理的に証明できるのである。したがつて善惡両面ともに感激性の素因に乏しいという点から見て、そこが芸術的でないと難を打つ事はできる。その代りその書きぶりや事件の取扱方に至つては本来がただありのままの姿を淡泊に写すのであるから厭味おちいに陥る事は少ない。厭味とか厭味でないとかいう事は前にも芸術上の批判であると御断りしておきましたが、これが同時に徳義上の批判にもなるからして自然主義の文芸は内容のいかににかかわらずやはり道德と密接な縁を引いているのであります。というのはただありのままを銜てらわないで真率に書くというのが厭味のない描写としての好所であるのであるが、そのありのままを銜てらわないで真率に書くところを芸術的に見ないで道義的に批判したらやはり正直という言葉を同じ事象に対して用いられるのだからして、芸術と道德也非常

に接続している事が分りましょう。のみならず芸術的に厭味がなく道徳的に正直であるという事がこの際同じ物を指しているばかりではなく理知の方面から見れば真という資格に相当するのだから、つまりは一つの物を人間の三大活力から分察したと異なるところはないのであります。三位一体と申してもよいでしょう。

こう分解して見ると、一見道義的で貫ぬいている浪漫派の作物に存外不徳義の分子が発見されたり、またちよつと考えると徳義の方面に何らの注意を払わない自然派の流を汲んだものに妙に倫理上の佳所があつたり、そうしてその道義的であるや否やが一にその芸術的であるや否やで決せられるのだから、二者の關係は一層明瞭になつて来た訳であります。また浪漫、自然と名づけられる二種の文芸上の作物中にこの道徳の分子がいかに織り込まれるかともたいてい説明し得たつもりであります。

なお余論として以上二種の文芸の特性についてちよつと比較してみますと、浪漫派は人の気を引立てるような感激性の分子に富んでいるには違ないが、どうも現世現在を飛び離れているの憾みうらみを免まぬかれない。妄みだりに理想界の出来事を点綴てんてつしたような傾かたむきがあるかも知れない。よしその理想が実現できるにしてもこれを未来に待たなければならぬ訳であるから、書いてある事自身は道義心の飽満悦樂を買いに十分であるとするも、その実おのれ己には

切実の感を与え悪いものである。これに反して自然主義の文芸には、いかに倫理上の弱点が書いてあつても、その弱点はすなわち作者読者共通の弱点である場合が多いので、必竟ひつきずるに自分を離れたものでないという意味から、汚い事でも何でも切実に感ずるのは吾人の親しく経験するところであります。今一つ注意すべきことは、普通一般の人間は平生何も事の無い時に、たいてい浪漫派でありながら、いざとなると十人が十人まで皆自然主義に変ずると云う事実であります。という意味は傍観者である間は、他に対する道義上の要求がずいぶんと高いもので、ちよつとした紛ふん紜うんでも過失でも局外から評する場合には大変から苛い。すなわちおれが彼の地位にいたらこんな失体は演じまいと云う己を高く見積る浪漫的な考がどこかに潜ひそんでいるのであります。さて自分がその局に當つてやつて見ると、かえつて自分の見み縊くびつた先任者よりも烈はげしい過失を犯しかねないのだから、その時その場合に臨むと本来の弱点だらけの自己が遠慮なく露出されて、自然主義でどこまでも押して行かなければやりきれないのであります。だから私は実行者は自然派で批評家は浪漫派だと申したいぐらいに考えています。次に御話したいのは先年来自然主義をある一部の人となが唱となえ出して以後世間一般ではひどくこれを嫌きらつてはては自然主義といえど墮落とか猥褻わいせつとかいうものの代名詞のようになってしまいました。しかし何もそう恐れたり嫌

つたりする必要は毫ごうもないので、その結果の健全な方も少しは見なければなりません。元
来自分と同じような弱点が作物の中に書いてあつて、己と同じような人物がそこに現われ
ているとすれば、その弱点を有する人間に対する同情の念は自然起るべきはずであります。
また自分もいつかう過失を犯さぬとも限らぬと云う 寂じやく 寞まく の感も同時にこれに伴う
でしょう。己うぬぼれ 惚ほの面を剥はぎ取つて真直な腰を低くするのはむしろそういう文学の影響と
言わなければなりません。もし自然派の作物でありながらこういう健全な目的を達するこ
とができれば、それこそ作物自身が悪いのであると云わなければなりません。悪いとい
う意味は作物が出来損できそこなつているのです、どこか欠点があると云うのです。前説明ぜんした言
葉を用いて評すれば、そういう作物にはどこか不道德の分子がある、すなわちどこか非芸
術のところがある、すなわちどこか偽りを書いているのだという事に帰着するのです。あ
りのままの本当をありのままに書く正直という美德があればそれが自然と芸術的になり、
その芸術的の筆がまた自然善い感化を人に与えるのは前段の分解的記述によつてもう御会
得とくになった事と思います。自然主義に道義の分子があるという事はあまり人の口にしない
ところですからわざわざ長々と弁じました。もつともただ新らしい私の考だから御吹聴ごふいちよう
をするという次第ではありません。御承知の通り演題が「文芸と道徳」というのですから

特にこの点に注意を払う必要があつたのです。

これで浪漫主義の文学と自然主義の文学とが等しく道德に關係があつて、そうしてこの二種の文学が、冒頭に述べた明治以前の道德と明治以後の道德とをちゃんと反射している事が明瞭めいりようになりましたから、我々はこの二つの舶来語を文学から切り離して、直に道德の形容詞として用い、浪漫的道德及び自然主義的道德という言葉を使って差支さしつかえないでしよう。

そこで私は明治以前の道德をロマンチックの道德と呼び明治以後の道德をナチュラリスチックの道德と名づけますが、さて吾々われわれが眼前にこの二大區別を控えて向後我邦わがくにの道德はどんな傾向を帯びて發展するだろうかの問題に移るならば私は下しものごとくあえて云いたい。「ロマンチックの道德は大体において過ぎ去つたものである」あなた方がたがなぜかと詰問なさるならば人間の智識がそれだけ進んだからとただ一言答えるだけである。人間の智識がそれだけ進んだ。進んだに違ない。元は真まことしやかに見えたものが、今はどう考えても真とは見えない。嘘うそとしか思われないからである。したがって實在の權威を失つてしまふからである。単に實在の權威を失うのみならず、実行の權利すら失つてしまふのである。人間の智識が発達すれば昔のようにロマンチックな道德を人に強しいても、人は誰も躬きやうこ

行^うするものではない。できない相談だという事がよく分つて来るからである。これだけでもロマンチックの道徳はすでに廃^{すた}れたと云わなければならない。その上今日のように世の中が複雑になつて、教育を受ける者が皆第一に自治の手段を目的とするならば、天下国家はあまり遠過ぎて直接に我々の眸^{ひとみ}には映りにくくなる。豆腐屋が豆を潰^{つぶ}したり、呉服屋が尺^{はか}を度^{はか}つたりする意味で我々も職業に従事する。上下^{こうそ}挙^あつて奔走に衣食するようになれば経世利民仁義慈悲の念は次第に自家活計^{くわくけい}の工夫と両立しがたくなる。よしその局に当る人があつても単に職業として義務心から公共のために画策遂行するに過ぎなくなる。しかのみならず日露戦争も無事に済んで日本も当分はまず安泰の地位に置かれるような結果として、天下国家を憂^{うれい}としなくても、その暇に自分の嗜欲^{しよく}を満足する計をめぐらしても差^さ支^{かえ}ない時代になつてゐる。それやこれやの影響から吾^{われわれ}々は日に月に個人主義の立場からして世の中を見渡すようになってゐる。したがつて吾々の道徳も自然個人を本位として組み立てられるようになってゐる。すなわち自我からして道德律を割り出そうと試みるようになってゐる。これが現代日本の大勢だとすればロマンチックの道德換言すれば我が利益のすべてを犠牲に供して他のために行動せねば不徳義であると主張するようなアルトルイスチック一方の見解はどうしても空疎になつてこなければならぬ。昔の道德すなわち

忠とか孝とか貞とかい字を吟味ぎんみしてみると、当時の社会制度にあつて絶対の権利を有しておつた片方にのみ非常に都合の好いような義務の負担に過ぎないのであります。親の勢が非常に強いとどうしても孝を強しいられる。強いられるとは常人として無理をせず自己本来の情愛だけでは堪たえられない過重の分量を要求されるという意味であります。独ひとり孝ばかりではない、忠でも貞でもまた同様の観があります。何しろ人間一生のうちで数えるほどしかない僅きん少しやうの場合に道義の情火がパツと燃焼した刹那せつなを捉とらえて、その熱烈純厚の氣象きしやうを前後に長く引き延ばして、二六時中すべてあのごとくせよと命ずるのは事実上有り得べからざる事を無理に注文するのだから、冷静な科学的觀察が進んでその偽りに気がつくと同時に、權威ある道德律として存在できなくなるのはやむをえない上に、社会組織がだんだん変化して余儀なく個人主義が発展の歩武ほぶを進めてくるならばなおさら打撃こうむを蒙るの明かであります。

こういうと何だか現在に甘んずる成行主義なりゆきのように御取りになるかも知れないが、その誤解されては遺憾いかんなので、私は近時の或人のように理想は要いらないとか理想は役に立たないとか主張する考は毛頭ないのです。私はどんな社会でも理想なしに生存する社会は想像し得られないとまで信じているのです。現に我々は毎日或る理想、その理想は低くもあ

ちいさ
り小さくもありましょう、がとにかく或る理想を頭の中に描き出して、そうしてそれを明日
実現しようと努力しつつまた実現しつつ生きて行くのだと評しても 差^さ支^{しつかえ}ないのです。
人間の歴史は今日の不満足を次日物足りるように改造し次日の不平をまたその翌日柔らげ
て、今日^{こんにち}までつづいて来たのだから、一方から云えばまさしくこれ理想発現の経路に過
ぎんのであります。いやしくも理想を排斥しては自己の生活を否定するのと同様の矛盾に
陥^{おちい}りますから、私はけつしてそう云う方面の論者として諸君に誤解されたくない。ただ私
の御注意申し上げたいのは輓^{ばん}近^{きん}科学上の発見と、科学の進歩に伴って起る周密公平の観
察のために道徳界における吾々の理想が昔に比べると低くなった、あるいは狭くなったと
いうだけに過ぎない。だから昔のような理想の持ち方立て方も結構であるかも知れぬが、
また我々も昔のようなロマンチストでありたいが、周囲の社会組織と内部の科学的精神
にもまた相当の権利を持たせなければ順応調節の生活ができにくくなるので、自然ナチュ
ラリスチックの傾向を帯びるべく余儀なくされるのである。けれども自然主義の道徳と云
うものは、人間の自由を重んじ過ぎて好きな真似^{まね}をさせるといふ虞^{おそれ}がある。本来が自己本
位であるから、個人の行動が放縱^{ほうじゆう}不羈^{ふき}になればなるほど、個人としては自由の悦楽を味
い得る満足があると共に、社会の一人としてはいつも不安の眼を睜^{みは}って他を眺めなければ

ならなくなる、或る時は恐ろしくなる。その結果一部分の反動としては、浪漫的の道德がこれから起らなければならぬのであります。現に今小さい波動として、それが起りつつあるかも知れません。けれども要するに小波瀾しょうはらんの曲折えがを描く一部分に過ぎないので大体の傾向から云えばどうしても自然主義の道德がまだまだ展開して行くように思われます。以上を総括して今後の日本人にはどう云う資格が最も望ましいかと判じてみると、実現のできる程度の理想を懐いだいて、ここに未来の隣人同胞との調和を求め、また従来の弱点を寛容する同情心を持して現在の個人に対する接触面の融合剤とするような心掛——これが大切だろふと思われるのです。

今日の有様では道德と文芸と云うものは、大變離れているように考えている人が多数で、道德を論ずるものは文芸を談ずるを屑いさぎよしとせず、また文芸に従事するものは道德以外の別天地きがに起臥きしているように独りひとぎめで悟さとつているごとく見受けますが、蓋けだし両方とも嘘うそである。その嘘である理由は今までやって来た分解で御合点ごがてんが行つたはずであります。もつとも社会と云うものはいつでも一元では満足しない。物は極きわまれば通ずとかいう諺ことわざの通り、浪漫主義の道德が行きづまれば自然主義の道德がだんだん頭を擡もたげ、また自然主義の道德の弊が顕著になつて人心がようやく厭いや氣けに襲おそわれるとまた浪漫主義の道德が反動として起

るのは当然の理であります。歴史は過去を繰返すと云うのはこの事にほかならんのですが、厳密な意味でいうと、学理的に考えてもまた実際に徴してみても、一遍過ぎ去つたものはけつして繰返されないのです。繰返されるように見えるのは素人だからである。だから今もし小波瀾としてこの自然主義の道徳に反抗して起るものがあるならば、それは浪漫派に違いないが、維新前の浪漫派が再び勃興する事はとうてい困難である、また駄目である。同じ浪漫派にしても我々現在生活の陥欠を補う新らしい意義を帯びた一種の浪漫的道徳でなければなりません。

道徳における向後の大勢及び局部の波瀾として目前に起るべき小反動は要するにかくのごとき性質のものであつて、道徳と文芸との密接なる関係もまた上説のごとしとすれば、これからわが社会の要する文芸というものもまた同じ方向に同じ意味において発展しなければならぬのも、また多言を要せずして明かな話であります。もし活社会の要する道徳に反対した文芸が存在するならば……存在するならばではない、そんなものは死文芸としてよりほかに存在はできないものである、枯れてしまわなければならないのである。人工的に幾ら声を囁かして天下に呼号してもほとんど無益かと考えます。社会が文芸を生むか、または文芸に生まれるかどつちかはしばらく措いて、いやしくも社会の道徳と切つても切

れない縁で結びつけられている以上、倫理面に活動するていの文芸はけっして吾人内心の欲する道德と乖離^{かいり}して栄える訳がない。

我々人間としてこの世に存在する以上どうもがいても道德を離れて倫理界の外に超然と生息する訳には行かない。道德を離れることができなければ、一見道德とは没交渉に見える浪漫主義や自然主義の解釈も一考して見る価値がある。この二つの言葉は文学者の専有物ではなくつて、あなた方^{がた}と切り離し得べからざる道德の形容詞としてすぐ応用ができるというのが私の意見で、なぜそう応用ができるかという訳と、かく応用された言葉の表現する道德が日本の過去現在に興味ある陰影を投じているという事と、それからその陰影がどういう具合に未来に放射されるであらうかという予想と——まずこれらが私の演題の主眼な点なのであります。

——明治四十四年八月大阪において述——

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本で、表題に続いて配置されていた講演の日時と場所に関する情報は、ファイル末に地付きで置きました。

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年12月23日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文芸と道徳

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>